展望

宮柊二『小倉百人一首』

水辺あお

宮柊二『小倉百人一首』という本があると聞いて心惹かれた。近現代の歌人たちは主に万葉集を重視し、古今集や新古今集の時代の歌を中心にした百人一首は遠ざけていると思っていたからである。

学習研究社から昭和54年に刊行された大型本で、『日本の古典』全21巻の第11巻にあたる。図版が多くビジュアルで読みやすいが、電車で読むには適さない。

この本の月報に柊二が書いた「百人一首とわたし」があり、それによれば、柊二は十歳のころ歌がるたで「百人一首」を知ったという。実家が書籍商で、年末が近づくと「百人一首」の歌がるたなどが店先に並んでいた。

柊二は子どもながらに歌をいくつか覚えていた。のちに近代の短歌に親しみ、自分で歌をつくるようになって、正岡子規の『歌よみに与ふる書』なども読んだ。そして、近代の歌には百人一首の調べのようなものは全くないとわかり、むしろ忘れるほうに積極的だったと書いている。

戦後になって、幾種類もの歌がるたが売り出され、歌がるた合戦も新聞やテレビで報じられるようになった。そんなころに百人一首の仕事の依頼があり、いままでの反省もあって、この際ひとつ百人一首に対する理解を深めてみようとしたのだ。萩原朔太郎が昭和8年に言った「小倉百人一首の妙趣すら解らないで、ひとかどの歌よみ顔をしている現代歌壇の諸家たちには、少しく奇異の念を抱かざるを得ない」という言葉に共鳴したこともあった。

江戸時代から貴賤を問わず普及したのだから、その調べは後代の人の作歌に影響しないはずはなかろう、近代の歌人たち、特に明治新派期の歌人の作家の当初には、百人一首をなぞったあとが見えるにちがいない。そうすれば百人一首から近代短歌へというすじみちも見えるかもしれない、との思いを持って柊二はこの仕事に臨んだ。二年七か月かかった。そして「百人百色」の多様性が、この仕事を終えての実感だとしめくくった。

実はこの時期、柊二は多忙なうえに体調を崩していた。すでに昭和48年に糖尿病と関節リュウマチを患い、選者であった翌年の宮中歌会始の儀には病院から出席した。昭和51年の暮れには脳血栓に襲われた。昭和54年に体調はさらに悪化し、猪苗代湖に近いリハビリ温泉病院で療養した。そういう中で、この年に『小倉百人一首』が刊行されたのだ。闘病中に執筆されたとはいえ、柊二の口語訳と鑑賞は細部にまで言葉が尽くされ、百首それぞれの理解が深まる。

白洲正子は『私の百人一首』で、歌を味わうためにはあえて口語訳にしない、と語る。重層的なイメージが単純化されてしまうからだろう。とはいえ口語訳がないと理解しにくい歌も多い。たとえば、鎌倉右大臣（源　実朝）の「綱手」である。世の中は変わらぬ世であってほしい。岸近くでこぐ舟の日々の営みは変化もあるが、変わらぬ身にしむながめだと歌った93番の、

世のなかは常にもがもな渚こぐあまの
小舟の綱手かなしも

の「綱手」。説明がなければ、舟を岸につなぎとめているだけの綱がイメージされがちだ。が、柊二は「たいてい岸ちかくこぐ舟がきょうは曳き舟で綱をかけて曳かれてゆく」と丁寧に描く。ひく舟、ひかれる舟の動きが見え、景が広がる。